

編集後記

本号は、従来私の研究発表を直接ご支援頂いた先生方、若しくは共同で研究成果を発表した先生方、並びにアジア太平洋研究科博士後期課程創設後間もない時期に私が主指導教員を担当して修了した諸氏に、退職記念号へのご寄稿をお願いした成果である。

スワン先生には、私の多くの論文の英訳を助けて頂いた。鄭成先生には欧陽恵氏との中国語インタビューで通訳をお願いし、その後鄭成氏単独の研究も加えて『中国に帰ったタイ華僑共産黨員』（2012年）を共著で出すことができた。

島田顕先生には、ロシアの RGASPI 文書館でのシャム共産党関連の資料調査をお願いし、更にロシア語文献の邦訳をお願いした。それらは「タイにおける共産主義運動の初期時代（1930-1936）」（『アジア太平洋討究』13号、2009年）論文に用いた。同論文は、Kosit Tiptiempong 氏によって『シャム共産党の起源』（2012年）のタイトルでタイ語訳された。

高橋勝幸氏には、タイでの様々なインタビューに同行をお願いした。Kosit 氏、高橋氏、豊島昇氏、田中絵麻氏は、アジア太平洋研究科博士後期課程の学生時代に、私が主指導教員を担当した。

Worasak Mahatthanobon 先生は、拙著『シャム華人の政治』（1996年）を共訳して以来の親友である。

私の最初の長期在タイ調査時に研究助手をお願いして以来の親友である、Nakharin Mektrairat 先生は、現在タイ憲法裁判所判事の要職にあるが、同氏からも諸国の憲法裁判所を比較した長文の論考を頂いたが、退職間際で多数の博論審査ややり残した仕事に忙殺され、私が翻訳する時間を捻出できなかったことは残念である。

私が主指導教員を担当したタイ人の博士後期課程修了者が、本号とは別に、タイ語の退職記念出版を準備しつつあると聞いている。

今回ご寄稿をお願いすることはできなかったが、私の科研費応募にご参加頂いた諸先生、博士論文の審査委員をお願いした諸先生、更には特殊法人アジア経済研究所、成蹊大学、早稲田大学アジア太平洋研究科でお世話になった同僚の方々など、半世紀近い私の研究人生は、実に多数の方々のご支援、ご協力を得て、継続できた。ここに、あらためて深甚の感謝を申し上げる。

村嶋英治（2022年2月14日記）